

「灯火」

高松市立国分寺南部小学校 六年 清原 颯多

緑の木々がおいしげる道をずっと歩いて山の頂上付近まで行くと、そこには、色々な動物達の集まる一軒屋がある。夜になると、月明かりの光とともに、にぎやかな話し声が聞こえてくる。僕は、その声を頼りに歩いて行って草かげにかくれて見てみた。

「今日から新しく入った、チャボのサクラとユメとゴマです。よろしくお願いします。」

と新米の三人があいさつをしていたのが聞こえてきた。僕はそれを見て思わず、

「小さくてかわいいなあ。」

とつぶやいた。

先輩である、犬のクッキーが口を開いた。

「新米さん達、よろしくね。私は年をとっているから、目が悪く、あまり見えていない。君たちを鮮明に見ることはできないのが、残念だ。私は、十七才と老人だから長くは生きられない。いつかその時が来るまでは、みんなで仲良く過ごそう。」

と話して、その日は、集会が終わり家路に着いた。帰ってから、頭の中でクッキーが話していた言葉がふと気になった。

「目があまり見えていないのか。だから急に体をさわると怒ってたんだなあ。嫌いになったから怒ってたわけじゃなかったんだ。よかった。最後に言っていた、その時とは何なんだろう。」

考えながらも眠たくなり眠ってしまった。

数日後の雨がたくさん降り続く日、テレビでは、注意報やけい報も流れる梅雨の時期。家にある、ふ卵器の中で温めていた卵の中の四つが揺れ始めた。卵を手にとって耳に当てていたお母さんが、

「もしかしたら、もうすぐ産まれるのかも知れない。卵から、少し声が聞こえてるから。」と教えてくれた。早く産まれないかとワクワクした。

その日の夜、動物達はまた集まっていた。

「鳥の赤ちゃんがもうすぐ産まれると今日聞いたよ。また、あの家にもぎやかになるし人間達は、忙しくなるな。」

と皆が楽しそうに話していた。まるで、自分の家族が増えるのを楽しみにしている感じだった。次の日も朝から大雨と雷がすごかった。こんなに連日続くと、気持ち的にも下がるばかりだ。夕方頃、

「からが割れて口ばしが見え始めたよ。声も前より大きくなってるから、きっと今日中に産まれるよ。」

お母さんが少しあわてた口調だった。数分後に、

「ピーピー。」

と小さな声が出た。急いで見に行くと、足だけがまだ、からの中に入っていて、顔は、外に出ている。

「頑張れー。頑張れー。後少し。」

と必死で応援した。それに答えるかのように無事、産まれた。続いて二羽目も誕生した。

でも、三羽目と四羽目が、前日から卵にヒビが入っているのに割れそうにない。お母さんが、

「今日、産まれなかったら無理かも知れないし、手伝って産まれてこれてもダメかも。でも卵を割る手伝いをして無事に産まれてきてくれることを願ってやってみよう。」

そう説明しながら、手袋をはいて、卵に声をかけながら、ゆっくり針を使って、割っていた。その手は、小刻みに震えながらも慎重だった。

「大丈夫。無事に産まれてこようね。」

と話していた。見ている僕は、息を吸うのも忘れ、手のひらも汗でびしょびしょにぬれていた。数分後、お母さんの手の上には、小さくも一生存けん命、息をしている三羽目と四羽目があった。無事に産まれたのだ。

「卵から出したばかりだから、まだ弱っているから、今は、見守ろうね。」

と言いながら、ふ卵器の中に入れた。僕は、ふ卵器の側でずっと見ている事にした。側では、クッキーも見守って居た。三時間くらいが経過する頃、そっとのぞくと、立派に立って歩いていた。嬉しかった。こんなに、卵から産まれてくるのが難しく命がけだということを知ら

なかった。ヒビが入ったら、パカリと割れてすぐに誕生できるものだと思っていた。「命」の誕生は、簡単ではないと教えてくれた。

「よく頑張ったね。おめでとう。」

と僕は、ふ卵器の中の小さなヒナ達に言った。夜は、もちろん集会があり、その話でにぎわっていた。

「四羽、無事に産まれたんだって。良かったね。」

と、誕生した事を喜んでいた。そろそろ皆が帰ろうと準備をした時、クッキーは重たい口を開いた。

「最近、体調が悪くなってきている。その時が近づいてるかも知れない。もし、その時がきたら、人間達を頼むよ。」

それだけを伝えると帰っていった。

梅雨も明けて暑い日が始まるうとしていた頃、クッキーは、体調を崩してしまった。寝たきりになったのだ。歩く事もできず抱っこで移動をしていた。日に日に、意識も薄れかけていく中で、お母さんは、抱っこで、夕やけの外を歩いていった。その日の夕やけ空は、ものすごくきれいな色だった。家の空気ばかりではなく、外の空気やにおいも必要だからと言っていた。まるで、夜の集会仲間と別れを伝えさせているかのように僕には見えた。

次の日、クッキーは虹の橋を渡る旅に出してしまった。その日の夜は、誰も集まらず、静かな夜だった。ノツシーもセミも鳥も、まるで悲しんでいるかのようなようだった。ぼくも、たくさん泣いた。クッキーとの十数年間は、一緒に過ごした思い出がたくさんあった。泣かずには居られないし、居なくなっただとも思えない。悲しみのある日を過ごしていると、

「いつかきつと、またどこかで会える。その日を何十年も待っているよ。それまで、笑顔で過ごしてね。見守ってるよ。」

と、僕にお母さんが言ってくれた。その言葉を聞いた時、大声で泣いた。それとともに、

「いつの日かクッキーに会った時、僕の成長を喜んでもらえるように頑張るぞ。」と決めた。

この夏、二つの「灯火」を全て教えてもらった。誕生も別れも簡単ではない。誕生も自ら決めてくるけれど、無事に産まれてこれるとも限らない、「誕生の灯火」。

今夜も、動物たちの集会は続いている。僕も草かげから、今日の題名は何かと楽しみに見ている。

今、振り返ると、お母さんがあの時、話してくれた言葉は、クッキーからの最後のメッセージで、夕やけの日に、抱っこしている時に、二人で話していたんだと分かった。

そして、クッキーが、話していた、「あの時」とは、「別れの時」で、その時が近づいていた事に自分自身も気付いていたのだということも分かった。年をとり、目が悪くなってしまい、鳥達を見ても、

「見えにくい。」

と話していたけど、今は、きつと鮮明に見えていて、きつと虹の橋の上から笑って見てくれているはずだろう。

今日も、サクラ、ユメ、ゴマと新しく産まれた四羽は、仲良く家の中で過ごしていて、

「ピーピー。」

と鳴き声がひびいている。すくすく育って大きくなってほしいと僕は願っている。

夜の集会には、実は、動物だけでなく、一人の人間が参加していた。それは、お母さんだ。

あの集会の席には、お母さんがいつも居たことを僕はまだ、気付いてないし、知らない。

「星になったクッキー。君の席は、いつまでも、いつまでも、誰もすわる事なく、僕の見えるところで空けておくからね。いつの日かまた、たくさん一緒に笑って話そう。待ってるよ。」
そして今夜も僕は、あの場所に行くのだ。笑い声や話し声を頼りに草の間を通過して、月明かりに照らされながら、たどり着く。

いつの日か、僕もその集会の中にまぎらう。